

太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

太田城跡

2022年3月

株式会社槙野ハウジング
高松市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、太田城跡の調査成果を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。
調査地 高松市太田上町 1129番地3
発掘調査 令和3年6月28日～7月10日
整理作業 令和3年7月12日～令和4年3月31日
調査面積 54 m²
- 3 発掘調査・整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社植野ハウジングが全額負担した。
- 4 発掘調査は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 山元敏裕、佐藤容、同会計年度任用職員 上原ふみが担当した。
- 5 整理作業は山元・佐藤・上原が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、第3章の第3節は山元と佐藤、その他の執筆及び編集は佐藤が担当し、山元・上原が補佐した。
- 7 本調査に関する以下の業務を委託した。
遺構測量写真撮影（石組）：株式会社四航コンサルタント
- 8 本報告書の高度値はTP（東京湾平均海面）を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
- 9 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD：溝 SP：柱穴 SK：土坑
- 10 遺構断面の記述の色調及び土質觀察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖 36版」を参照した。
- 11 本報告書の挿図として、2万5千分の1の高松市都市計画図を一部改変して使用した。
- 12 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目　　次

第1章 発掘調査の経緯と経過	第3章 調査の概要
第1節 発掘調査の経緯 ······ 1	第1節 調査の方法 ······ 5
第2節 確認調査の結果 ······ 1	第2節 基本層序 ······ 5
第3節 立会調査の結果 ······ 1	第3節 遺構と遺物 ······ 5
第4節 発掘調査の経過 ······ 2	
第5節 整理作業の経過 ······ 3	
第2章 地理的・歴史的環境	第4章 総括 ······ 13
第1節 地理的環境 ······ 3	
第2節 歴史的環境 ······ 3	

挿 図 目 次

第 1 図 太田城跡と調査対象位置図 ······ 1	第 10 図 SK1, SK6・19, 表層出土遺物実測図 ······ 10
第 2 図 確認調査位置図 ······ 2	第 11 図 表層（黒ブロック層）出土遺物実測図 ······ 10
第 3 図 立会調査位置図 ······ 2	第 12 図 SD2 埋土出土遺物実測図 ······ 10
第 4 図 確認調査平面図 ······ 2	第 13 図 SD1・2 の切合部分出土遺物実測図 ······ 11
第 5 図 太田城跡周辺の道路分布図 ······ 4	第 14 図 石組埋土出土遺物実測図 ······ 11
第 6 図 調査対象位置図 ······ 5	第 15 図 石組1出土遺物実測図 ······ 11
第 7 図 遺構配置図 ······ 7	第 16 図 石組1出土遺物実測図 ······ 12
第 8 図 遺構断面図 ······ 8	第 17 図 晴渠水路出土遺物実測図 ······ 12
第 9 図 石組平・立面図 ······ 9	

表　　目　　次

第 1 表 基準点座標一覧 ······ 5	第 3 表 出土遺物觀察表 2 ······ 16
第 2 表 出土遺物觀察表 1 ······ 15	第 4 表 出土遺物觀察表 3 ······ 17

写 真 目 次

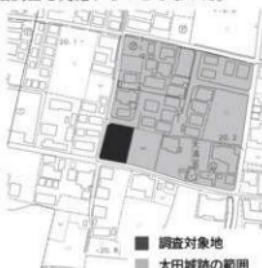
写真図版I 調査区西側（石組遺構）／晴渠水路1／晴渠水路2／石組1南壁 断面／SK1完掘	写真図版II SP5・6／SP27／調査区東側（ピット完掘）／SD1・2完掘／A-A'壁面／B-B'壁面
	写真図版III 出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

高松市太田上町 1129 番地 3 で宅地造成工事が計画された（第1図）。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「太田城跡」の南西端に位置していることから、令和3年4月13日付けで事業者から本市教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財の確認調査依頼が提出された。依頼を受けて、市教委は同年4月19日に確認調査を実施し、事業地内の全域で遺構や遺物を確認した。

その後、事業者から令和3年4月21日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出され、市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）へ進達したところ、同日付けで県教委より工事着手前に私道路設置箇所を発掘調査、擁壁や境界コンクリート設置箇所及び水道管撤去箇所を立会調査で対応するよう行政指導があった。これを受けて事業者と市教委で協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うこと及び費用面の合意が取れたことから、事業者と業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する市教委の三者で、同年6月1日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結した。その後、工事日程の変更が生じたことから同年6月15日付けで埋蔵文化財調査変更協定書を締結し、「太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。



第1図 太田城跡と調査対象地位置図

(S=1/4000)

第2節 確認調査の結果

事業者から依頼を受け、令和3年4月19日に確認調査を実施した。調査では、北側と南側に計2本のトレンチを設定した（第2図）。基本層序は地表から約0.2～0.3mの深さまで表土（床土）等が堆積し、その下が明褐色極細砂の地山である。

1 トレンチ（南側）は調査対象地の東端から東西方向に設定した。ピットと土坑が数か所で検出され、時期は中世～近世と考えられる。ピットの一つからは陶器片が出土している。

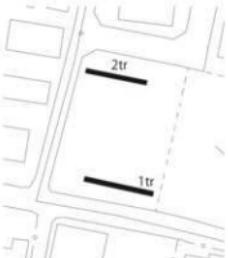
2 トレンチ（北側）は調査対象地の西端から東西方向に設定した。遺構はピットや土坑の他に、西端では南北に伸びる溝と、石や土器片が集まつた不明遺構が検出された。ピットからは土器片や金属片、陶器片等が出土し、時期は中世～近世のものと考えられる。西端の溝と不明遺構から遺物は出土していないが、溝の位置は太田城跡の西端に当たり、中世太田城に付随する堀跡である可能性が考えられた。不明遺構はその上部に隣接しており、近世のものと考えられる。

第3節 立会調査の結果

県教委からの行政指導により、①令和3年6月9日に水道管撤去箇所、②6月25日、③28日に擁壁設置箇所、④7月28日に境界コンクリート設置箇所の立会調査を実施した（第3図）。

①、④の立会調査では掘削が遺構面まで及ばず、遺構・遺物は確認できなかった。②では、深さ0.35～0.4mのところで遺構面に達し、土坑とピットを確認した。遺物は出土していないが、確認調査で中世～近世の遺構面と同一の層序であり、埋土も同様であることから同時期の遺構と考えられる。

③の立会調査では、深さ約0.4mほど掘削した。南北方向に伸びる溝が確認されたが、これは本発掘調査で見つかったSD 2（溝跡）に繋がる位置にあるため同一の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

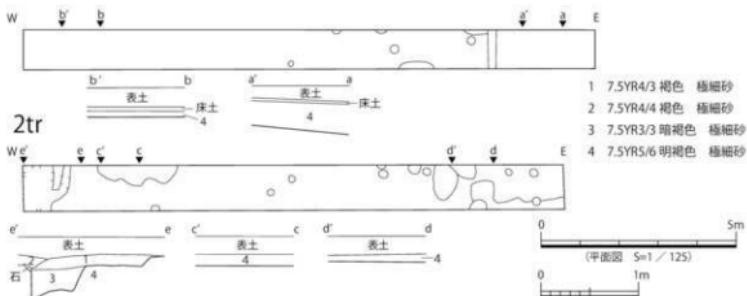


第2図 確認調査位置図 (S=1/1000)



第3図 立会調査位置図 (S=1/1000)

1tr



第4図 確認調査平面図

第4節 発掘調査の経緯

発掘調査は令和3年6月28日から開始し、同年7

月10日に埋戻しが完了して、現地での作業は終了し
た。主な調査経過は下記のとおりである。

6月28日（月）重機で遺構面まで掘削。溝、土坑、ピット等

の遺構を検出。

6月29日（火）ピットの断面図を取り、完掘。

6月30日（水）西側溝の掘削（中央部）で石列のような遺構を検出。

7月1日（木）西側溝の掘削。溝の西端で石組が下まで続いていることを確認。石組の平面図を作成。

7月2日（金）土坑の完掘と西側溝の掘削。西側溝の中央部で
石組が方形に並んでおり、また南側でも石が並
んでいる様子を確認。

7月4日（日）東側溝、西側溝の掘削。ピット等遺構の平面図
を作成。

7月5日（月）東側溝の掘削。西側溝の石組（中央部・南側）
の清掃と写真測量。

7月6日（火）東側溝の掘削。西側溝の石組（中央部・南側）
の北西隅から暗渠が延びていることが確認さ
れ、調査区西側を流れていた水路から水を取り
入れていたことが判明。

7月7日（水）西側石組を写真撮影・図面作成のち、順次解
体した。暗渠部分の見通し断面図を作成。

7月9日（金）西側石組の断削作業。
7月10日（土）西側石組暗渠の断面図、調査区北側土層図の
作成と写真撮影等終了。調査区完掘状況を撮
影し、全ての作業を終了。

第5節 整理作業の経過

調査終了後、令和3年7月から整理作業を開始した。7月に遺物洗浄を行い、8月～令和4年1月に遺物の接合や実測、遺構のトレース作業を行った。また8月～令和4年2月に順次、原稿の執筆・編集作業を進めていった。なお整理期間中に、石組遺構の写真測量を四航コンサルタントに委託して実施した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分を、讃岐平野の一部である高松平野が占める。高松平野は北は瀬戸内海、西は五色台山塊に接し、南の讃岐山地から流れる香東川や春日川、新川等の河川の働きにより形成された扇状地の沖積平野である。これらの河川の流れは高松平野に農耕に適した土壌をもたらしたが、中流域では伏流し地表の流路は潤れ川になることが多く、水不足解消のため早くから多くの溜池が造られた。平野部各地に点在する溜池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。高松平野を流れる諸河川の中でも最大規模の香東川は、平野形成に最も大きな影響を及ぼした。かつては石清尾山山塊の南麓で東西に分かれて河口へ注いでいたが、近世に行われた香東川の改修以降、東側の流路は水田地帯及び市街地の地下に埋没している。なお、17世紀の焼川直前の流路は現在、御坊川として今でもその名残を留めている。

本遺跡は御坊川の東方、高松平野の中央部にあり、南側の多肥地城はとともに旧香東川の伏流水と湧水（出水）が各所にみられる地域である。

第2節 歴史的環境

本遺跡のある太田上町は、近世の太田村に位置し、太田村は現在の太田上町・下町・松縄・伏石に当たる。明治23(1890)年に太田・伏石・松縄・今里・福岡村

が合併して近代の太田村が成立、昭和15(1940)年に高松市に合併し、この時、太田上町と下町に分かれた。古くは、香川郡十二郷の1つとして『和名抄』に「大田郷」の名がみえるが、「大田」の地名は、大和朝廷の直轄領である屯倉を耕作した部曲の民「田部」又は「大田部」が居住していたことに由来するとされる。『讃岐国風土記』に「畑にて沃壤の地なり」とあるように、古くから開けた肥沃な土地だったことが知られ、周辺には太田原高州遺跡や多肥北原遺跡といった遺跡があり、現在の太田、多肥の地域で8世紀の早い時期から条里地割の整備が進んでいたことが分かっている。

縄文時代～古墳時代

本遺跡周辺で知られる最も早い遺跡は縄文時代のもので、居石遺跡（伏石町）の自然流路から縄文晚期の土器等が一括で出土している。弥生時代後期以降になると遺跡の数、規模ともに増加する。

弥生時代前期には、汲仏遺跡（多肥下町）や凹原遺跡（多肥下町）から環濠や住居跡等の集落跡がみられる。後期には更に、太田下・須川遺跡（太田下町）や上天神遺跡（上天神町）、蛙股遺跡（太田下町・伏石町）、居石遺跡で竪穴住居等の集落跡が見つかっており、この周辺一帯に集落が広がっていたことが分かる。

古墳時代中期には太田下・須川遺跡で竪穴建物跡や掘立柱建物跡がみられる。前期には居石遺跡で祭祀道具等が、後期には凹原遺跡で溝が出土している。

古代

古代前半には、太田原高州遺跡で古墳時代終末から継続する竪穴建物跡や掘立柱建物跡、鍛冶炉跡がみられる。後半には、居石遺跡と太田下・須川遺跡の自然流路から10～11世紀の大型加工木や斎事などの祭祀道具が出土したほか、蛙股遺跡で11～12世紀の水田跡が、太田原高州遺跡で古代後期の道跡や掘立柱建物跡が見つかった。

中世～近世

中世前半の遺跡はなく、後半に入ると香西氏の武将佐藤孫七郎の居城である佐藤城跡が知られ、南東のキモンドー遺跡では佐藤城跡の南東隅の堀が検出されている。堀の両側に1～2段の石垣が残り、東西方向の堀では間仕切りの石垣も確認された。

中世の「太田郷」については、嘉元4(1306)年6月12日の『昭慶門院御領目録案』に「太田郷(鹿御方)」とある。

とあり、龜山院皇子兼良親王の母「鹿方」(三条局)が、院分国譜岐国内の所領の一つとして、阿野郡山田郷とともに太田郷を知行されている。南北朝期～戦国期にかけては、鐘や鰐口の銘文に「太田郷」の記載が散見される。最福寺喚鏡(明徳4(1393)年8月3日の日付)に「讃州太田郷最福寺」とあるほか、岡山県妙国寺所蔵の鰐口(永享9(1437)年11月18日の日付)には「讃州香東郡太田郷松直(郷)權現若一王子」とあり、現在の高松市松郷町付近は、当時太田郷に属していたことが窺える。また、室町時代に細川頼之の推挙により足利義満に仕えた連歌師周阿は太田郷の出であることが知られている。戦国時代には、栗林御林の東方に、太田郷松郷に熊野別当

湛増の後裔宮脇兵庫及び弾正の兄弟の屋敷跡があつたとされる。

近世には、キモンドー遺跡で土坑等がみつかっている。近世太田村は、香東郡東太田郷に属し、始めは生駒氏領で寛永19(1642)年以降は高松藩領となる。寛永年間に西島八兵衛により香東川東筋がせき止められ、その川筋上には鹿ノ井・坪井出水・大田井出水等、伏流水や湧水(出水)が多く点在しており、現在もその一部が残っている。

参考文献

- 高松市教育委員会 1996『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林道路』
高松市教育委員会 1999『キモンドー遺跡』
香川県教育委員会 2014『太田原高州遺跡』
高松市教育委員会 2021『太田下・須川遺跡(第5次調査)』
角川書店 1985『角川日本地名大辞典 37 香川県』
四国新聞社 1984『香川県大百科事典』



第5図 太田城跡周辺の遺跡分布図 (S = 1/16,000)

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

発掘調査の対象となったのは、事業地内で私道路設置箇所である（第6図）。掘削は、いずれも基本的には遺構検出面までは重機で掘削したのち、人力による掘下げを行った。測量に関する基準杭は、近隣の既設の基準点からレベル移動して、調査地に隣接する道路脇のベンチマーク（TV1, TV2）を基準点として測量を行った。記録に際しては、現地での遺構平・断面図は1/20で作図した。写真はデジタルカメラで記録した。



第6図 調査対象地位置図 (S = 1/1000)

第1表 基 準 点 座 標 一 覧

	X座標	Y座標	Z座標
TV1	144780.842	50046.913	19.488
TV2	144803.179	50052.241	19.66

第2節 基本層序

基本層序は、表土と底土の下に明黄褐色のシルト～極細砂層の地山が水平に堆積している。検出面は地山層の上面で、調査区の西側で溝2条と土坑を、東側で多数のビットを検出した。

第3節 遺構と遺物

SK 1(第7図、第10図)

SK 1は調査区中央で検出した。SD 2を切る円形の土坑である。また、土坑の底から20cm程掘り

下げたところで径10cm程度の細礫が多量に見られた。

出土遺物は灯明皿の黒色土器A類と考えられる土師器の皿(1)が出土したが、SD 2との切合い関係から、SD 2の埋没(様相2~3(1620~1650年))後に造成されたと考えられる(松本和彦氏による編年。以下陶磁器の編年はこれによる。(香川県埋蔵文化財センター2003))。

SP 1~26(第7図、第10図)

調査区の東側で検出した。ビットは埋土の違いによって、①黒褐色(SP 4, 6, 18, 21)、②褐色(SP 8, 11, 13, 15, 16, 17, 22, 24)、③灰褐色(SP 1, 2, 3, 5, 7, 9, 10, 14, 19, 23)の3種類に分類できる。種類ごとに埋没した時期が異なり、SP 5とSP 6の切合いから①の方が③より古く、SP 2とSD 2の切合いから③はSD 2よりも新しいと考えられる。ただし調査範囲が狭く、ビットの並びは判断できなかった。

また出土遺物は、SP 6から弥生土器高杯の脚部(1)が出土したほか、石がSP 3、SP16、SP19から出土した。石は何れもビットの底近くから出たが、根石として敷かれたものか、埋没に伴う混入かどうかは不明である。SP 3とSP16の石は自然石で、SP19の石(3)は丸く、一部摩耗した加工痕が見られる。出土遺物が殆ど無く時代が特定しづらいが、①は弥生時代の可能性が考えられ、②は不明、③はSD 2の埋没より後と考えられる。

表層(黒ブロック層)(第11図)

調査区の表層からは、弥生土器の壺(4)、土師器の碗(5)が出土した。また、SD 1の埋土表層の黒ブロックを含む土層からは弥生土器高杯の口縁端部(6・7)、底部(8・9)、須恵器高台付杯(10)、土師器擂鉢(11)、陶器の碗底部や壺(12~14)が出土しており、弥生~中世にかけての遺物が混入していたことから、土を周辺地域から持ち込んだ際に混入したと推測される。現在、太田城跡の近隣で確認されている遺跡は少ないが、もともと太田城跡周辺にはこれらの時期の遺跡が多くあった可能性が考えられる。

SD 1・2(第7図、第16・17図)

調査区の西側で検出した。西側をSD 1、東側をSD 2とする。SD 1に重複して検出した石組によっ

て大半が切られているが、SD 2 に並行する溝と想定される。SD 1・2 の前後関係については、両溝の上部を覆っていた黒色ブロックを含む暗褐色細砂～極細砂層によって平面で確認ができず、唯一調査区北端の土層観察において、SD 2 が切っていることを確認した。

SD 1 は唯一確認できた北壁土層及び周辺部の状況からはV字状を呈する。遺構の規模は幅1.5 m、深さ0.55 mである。土層は、4層に分層できる。最下層では、地山を含む極細砂であるが、それより上はシルト質極細砂である。土層堆積状況からは、徐々に埋没したものと想定される。出土遺物は認められなかった。

SD 2 は土層観察から SD 1 を切る溝で、断面形状は緩やかな皿状を呈する。遺構の規模は幅2.8～3.0 m、深さ0.4 mである。土層埋土は断面作成箇所により異なるが2～4層の堆積を確認した。北壁及び南壁の土層では、下層付近を中心に地山ブロックを多量に含む層が認められることから、溝廃絶後、短期間に埋め戻された可能性が想定される。出土遺物は、須恵器皿(15)、同捏鉢(16)、土師器羽釜(17)(19)、同捏鉢(18)、陶器皿(20・21)、同碗(22)、加工円盤(23)、備前焼擂鉢(24)、陶器鉢(25)、磁器皿(26)、同碗(27)、石繖(28)、打製石斧(29)が出土している。(30)から(32)はSD1・2 の切り合い部分からの出土遺物である。(30)は土師器焰焰、(31)は陶器の鉢、(32)は備前焼擂鉢、(33)は丸瓦である。これらの出土遺物について、SD1 からは出土遺物が無いことから SD2 の出土遺物である可能性が高い。

石組遺構（溜井）（第9図、第12～15図）

SD 1 に重複して検出された平面形が方形状を呈する（石組1）と長方形状を呈する（石組2）の2つの石組遺構である。いずれの石組も北西部に暗渠の排水口がある。

石組1は内側の平面形が方形状を呈し、調査区西端中央部において検出した。構築状況から4壁同時に構築されているのではなく、まず西壁が構築され、その後、南壁→東壁→北壁の順に構築されていることがわかる。平面での内法は南北1.4 m、東西1.3 mで東西がやや狭い。各壁によって状況が異なる。

西壁の石積が最も残存状況が良い。西壁は高さ0.45 m、川原石を最大で5段斜め上方へ積み上げている、基礎石となる一段目は同じ高さの石材を揃えているが、2段目以上は、高さを揃える部分も一部認められるが、一定ではない。裏栗は直径5 cm程度の川原石を幅0.1 m程度入れている。

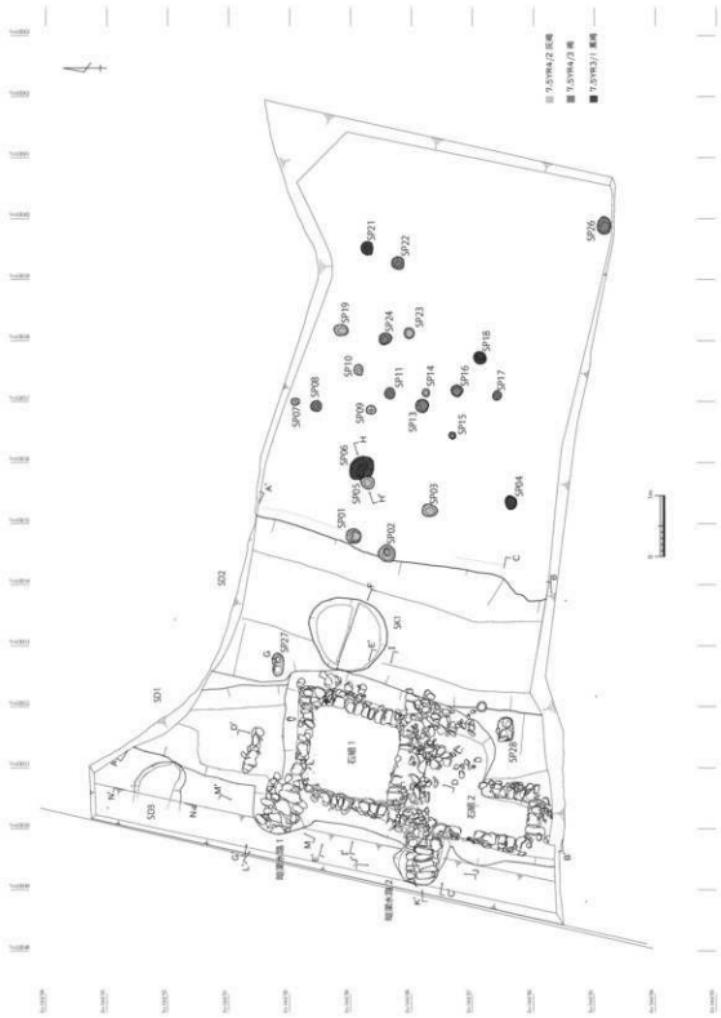
南壁は高さ0.25 m、最も残りの良い部分で3段である。東壁との接合部を越えた東端では、底からの高さが0.4 mとなり、本来は同様の高さであったと想定される。西壁ほど石材の規模は揃っていないが、高さを揃えながら積まれている。南壁の石積みは垂直に積み上げられ、裏栗は、幅0.5 mを検出した。裏栗の石材の規模は、一辺が5～10 cmのものが中心であるが、それを超える規模の石材も多く認められる。

東壁は高さ0.2 m、最も残りの良い部分で3段である。南壁と同様に石材の規模は揃っておらず、高さの違う規模の石材を組み合わせて積んでいる。裏栗は、他の壁と異なり、石積みに使用している石材と同様な規模の石材が認められる。

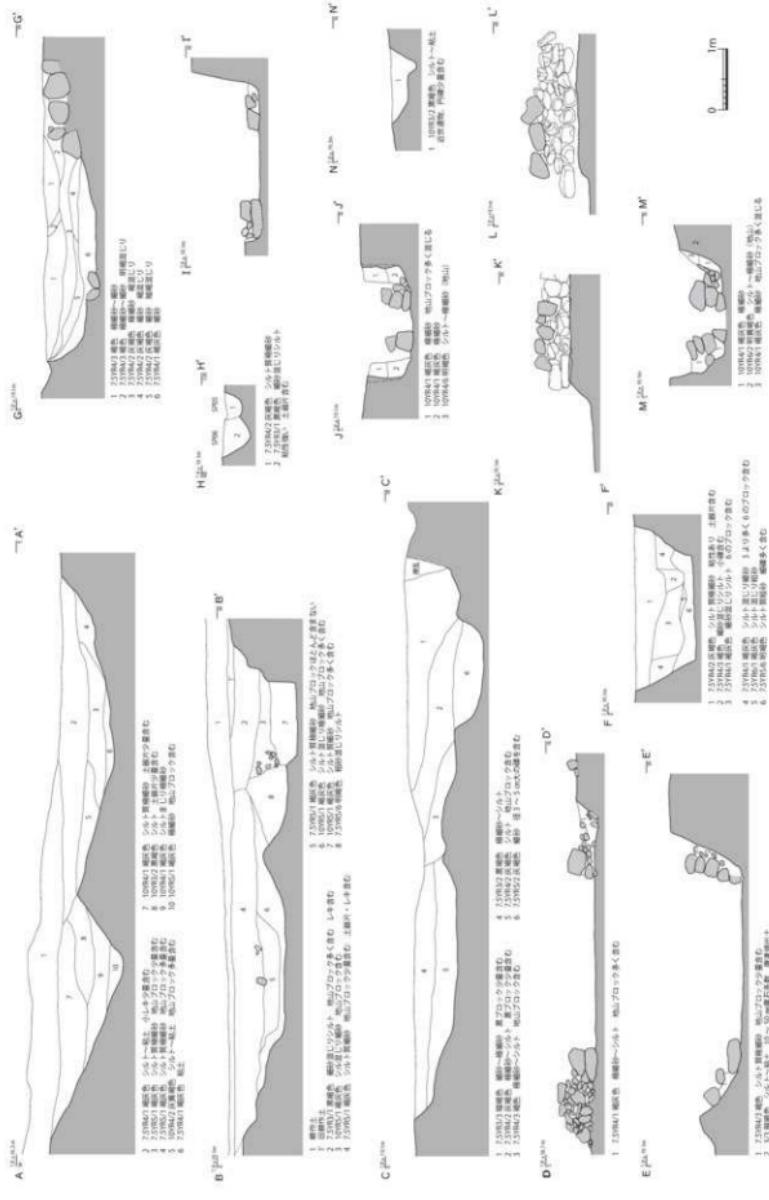
北壁は高さ0.25 m、最も残りの良い部分で2段である。使用している石材は、最も不揃いである。裏栗は認められず、シルト質極細砂で充填されている。圓面等を作成していないことから、正確な位置等は不明であるが、写真等での確認から石組1の北西隅より北側で東西方向の集石を確認している。調査時に並び等は認められなかったことから除去し、その下には、石積み等は認められなかったことから、原位置からは遊離しているが、位置関係から北壁の石積みを構成していた石材の可能性が考えられる。

石組1の0.8 m北側で長さ0.7 mの規模で東西に並ぶ石列を検出した。石列は1段のみで、石列の西側から3石目の下から鉄製鍤先(52)が出土した。位置関係から石組1に伴うと想定されるが、北壁の石積みの底場と石列の底場には0.15 mの段差がある。

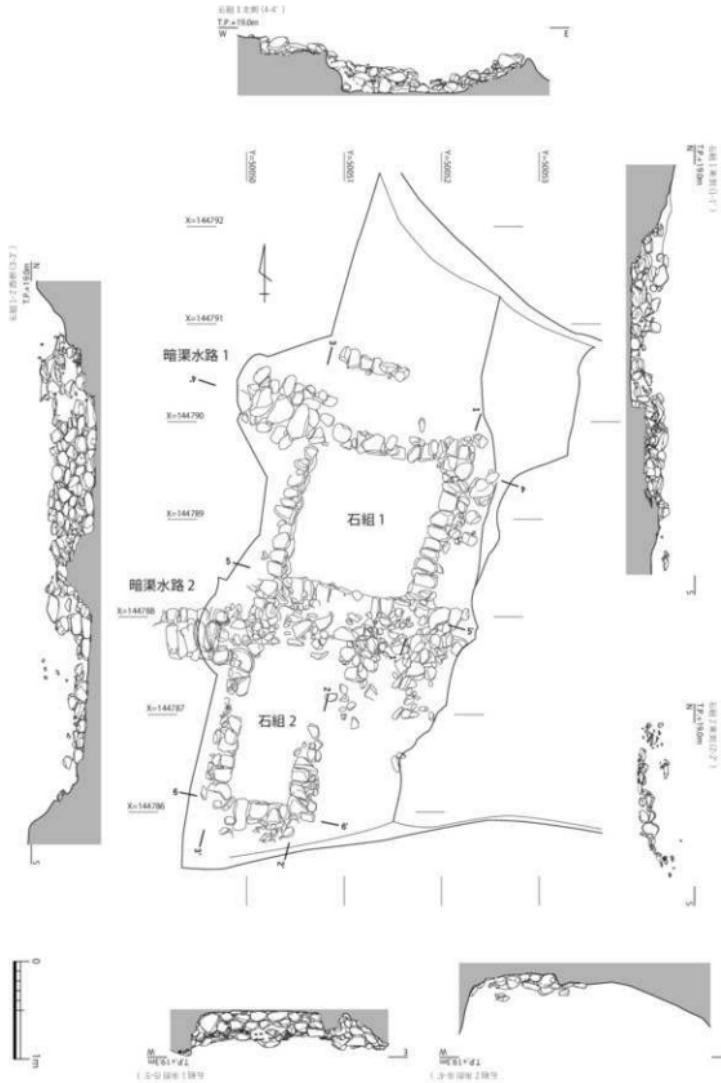
石組1の掘方の規模は、やや不整形ながら南北3.4 m、東西2.3 mである。東壁石積み設置部分より東側は傾斜しており、南壁の東端付近の石組の傾斜は、掘方の傾斜に影響を受けている。暗渠水路1は、石組1の北西部で検出した水路である。長さ1.4 m、幅0.2 m、水路内の高さ0.25 mである。石組1に接する部分を除き、石材を小口積みに3段程度積み上げ、蓋にした石材を両壁に架ける。暗渠水路の底場と石組1の底場



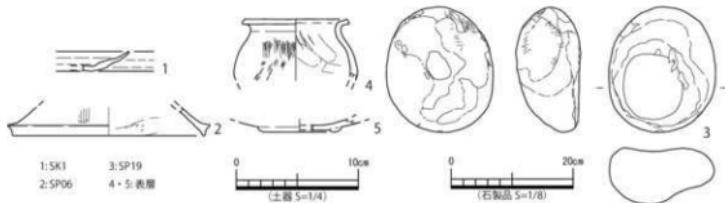
第7図 道構配置図 ($S = 1/80$)



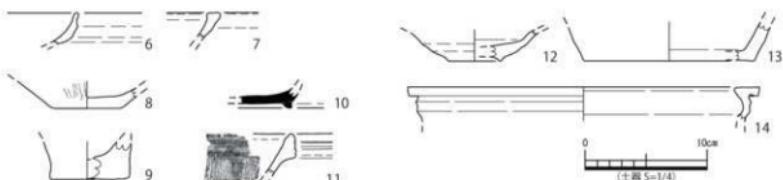
第8図 遺構断面図 ($S = 1/80$)



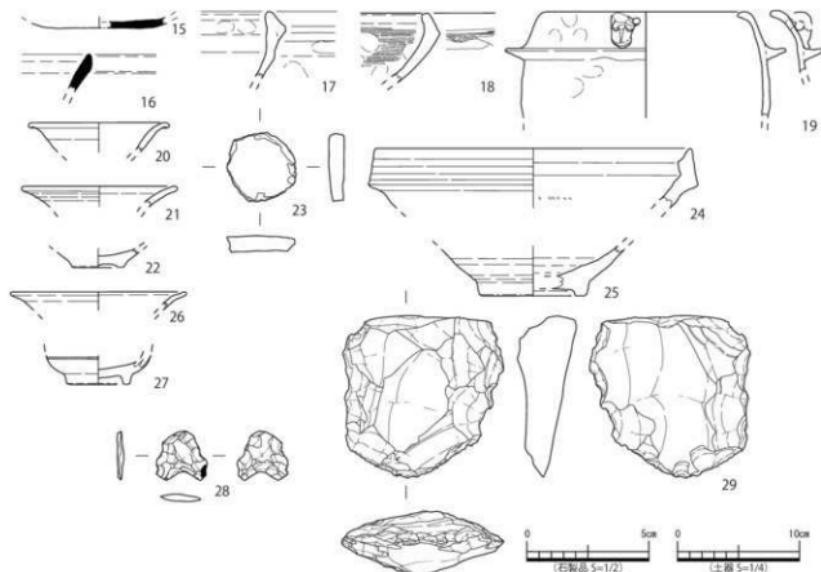
第9図 石組平・立面図 (S = 1/50)



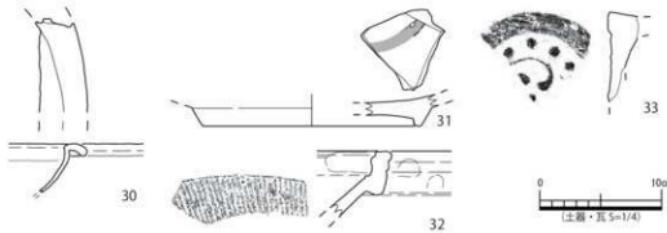
第10図 SK1、SP6・19、表層出土遺物実測図



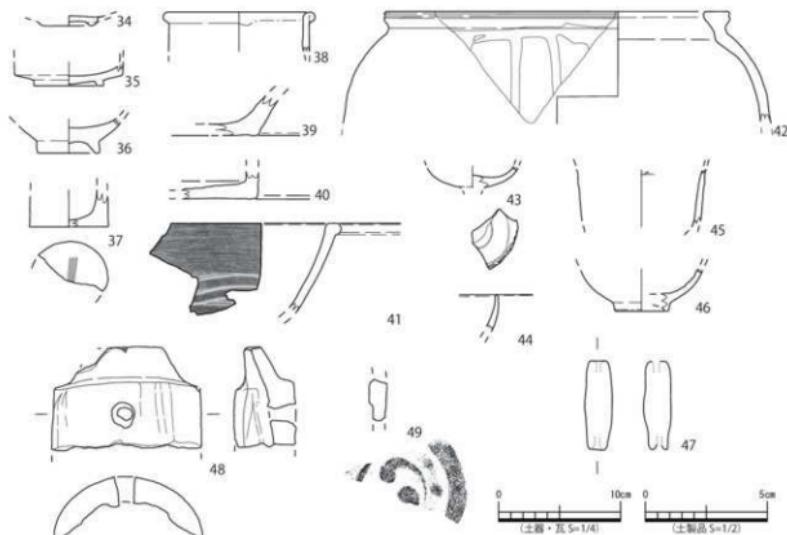
第11図 表層(黒ブロック層)出土遺物実測図



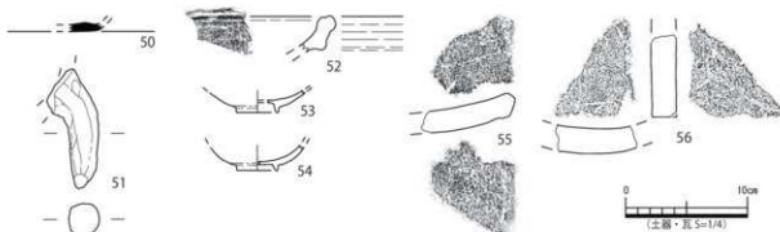
第12図 SD2 埋土出土遺物実測図



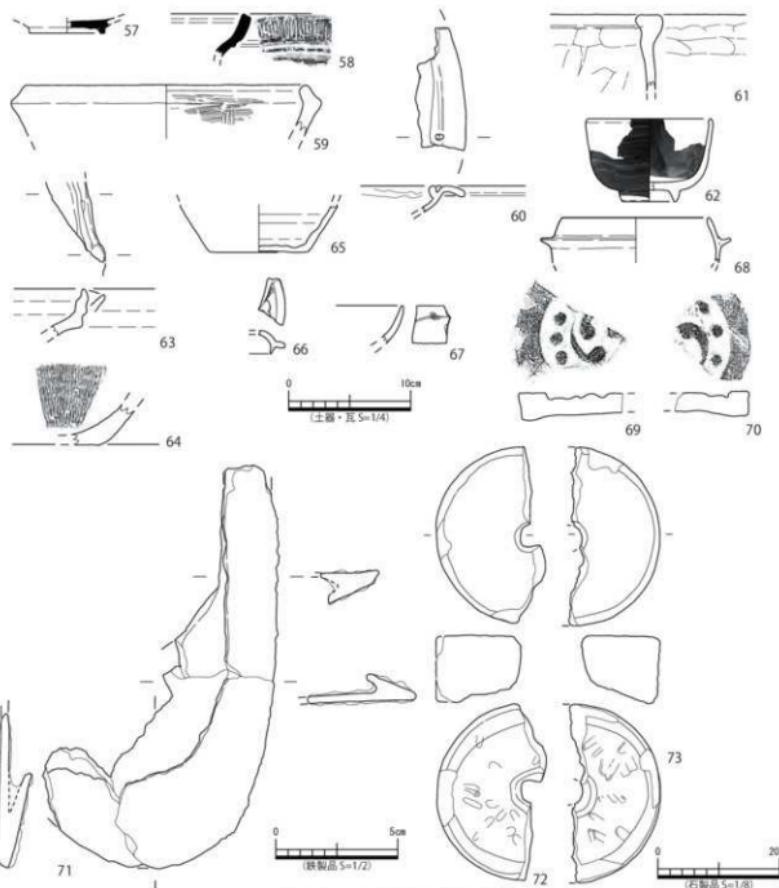
第13図 SD1・2の切合い部分出土遺物実測図



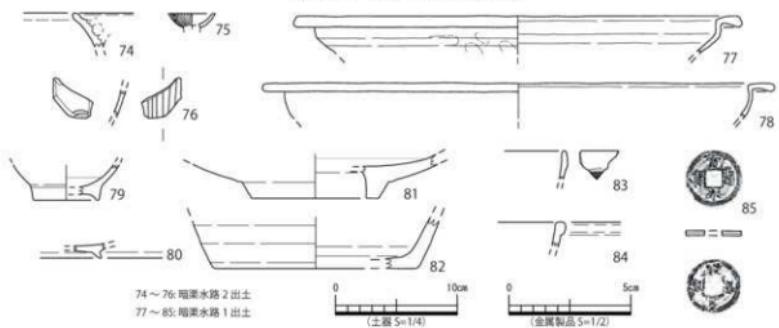
第14図 石組埋土出土遺物実測図



第15図 石組1出土遺物実測図



第16図 石組1出土遺物実測図



第17図 暗渠水路出土遺物実測図

の差は 0.05 m である。

石組 2 は、石組 1 の南側で検出した長方形形状を呈する。西壁、南壁、東壁を検出したが、北壁のみ未確認である。内法は東西 0.6 m、南北 1.5 m 以上である。

西壁は長さ 1.5 m、西壁北端では、石臼を 2 段に積んでいる状況を確認した。石材は小口積みにしているものが多く石積みの高さは 0.2 m である。裏栗は、幅 0.1 m で一辺 10 cm 程度の石材が認められる。

南壁は、最も残りの良い部分で 2 段の石積みが認められ、高さが 0.2 m である。使用している石材の規模にばらつきがある。裏栗は、幅 0.2 m で一辺が 0.1 m の石材が認められる。

東壁は長さ 0.8 m が残存する。使用している石材の規模も不揃いである。石積みは一部 2 段を確認しているが、使用している石材が小振りであるためである。裏栗は幅 0.1 m 程度で、一辺が 5 cm 程度の石材を使用している。

暗渠水路 2 は、石組 2 の北西で確認した水路である。長さ 1.0 m、幅 20 cm、高さ 0.25 m である。石組 2 に接する部分を除き小口積みの石材を 2 段積みにし、両壁の天端に石材を架けて蓋石とする。暗渠水路の底場と石組 2 の底場との差は 0.15 m である。

石組の埋土出土遺物は、土師器挽(34)、陶器碗底部(35・36)、備前壺(37)、陶器(唐津)壺(38)、陶器壺(39)、陶器建水(40)、陶器鉢(41)、同壺(42)、磁器小挽(43)、同碗(44)、同猪口(45)、同壺(46)、管状土錘(47)、丸瓦(48)、軒丸瓦(49)が出土している。

石組 1 の石組内部裏栗出土遺物は、須恵器杯(50)、土師器足釜(51)、陶器擂鉢(52)、陶器碗(53)(54)、平瓦(55・56)、須恵器碗(57)、同壺(58)、土師器擂鉢(59)、同培培(60)、同炭入れ壺(61)、陶器(唐津)碗(62)、備前擂鉢(63・64)、磁器蓋(66)、同碗(67)、瓦質土器足釜(68)、軒丸瓦(69)(70)、鉄製鍬先(71)、石製石臼(72・73)である。

暗渠水路出土遺物は、暗渠水路 2 から土師器羽釜(74)、磁器紅猪口(75)、磁器碗(76)、暗渠水路 1 から土師器培培(77・78)、陶器碗(79・80)、同壺(81)、同底部(82)、陶器天目碗(83)、陶器口縁部(84)、貨幣(寛永通宝)(85)である。

SD 3 (第 7 図)

調査区北西隅で検出した。SD 1 に接続する溝である。西側は現用水路の掘方に切られて不明である。断面形状は南側が緩やかで北側が深くなる。検出長は 0.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 m である。土層埋土は黒褐色シルト～粘土の単層である。遺物は出土していない。

SP27、28 (第 7 図)

SD 1・2 の底面に近い高さで SP27、28 を検出した。場所は石組 1・2 の東側に当たり、石組遺構の外郭に沿うように並ぶ。

第 4 章 総括

弥生時代

SP4、6、18、21

調査区東側で検出した多数のピットの内、黒褐色の埋土を伴う SP4、6、18、21 からは弥生土器が出土しており、弥生時代以前の時期である可能性が考えられる。なお、調査範囲が狭くピットの並びは判断できなかったため性格等の詳細は不明である。

近世以前

SD 1・2

調査区西端で南北に延びる SD 1 と、その東側に隣接する SD 2 を検出した。SD 1・2 は同じ機能として使用されていたと考えられるが、埋土の切合いから埋没時期にはズレがあり、SD 1 → SD 2 の順に埋没したと考えられる。SD 1 は遺物を検出してないため時代の特定はできない。SD 2 については、埋土から肥前系陶器や瀬戸・美濃系陶器が出土していることから、使用時期は下っても様相 2 ~ 3 (1620 ~ 1650 年) の 17 世紀前半までと推測される。

なお、本調査区の北側で確認調査、南側で立会調査を実施している。調査範囲が狭く詳細は不明だが、SD 1 は北へ延び、SD 2 は南に延びる状況が確認されている。調査区は太田城跡の南西端に位置するため、SD 1 と SD 2 は中世太田城に伴う堀であったと推測される。

近世～近代

石組遺構（溜井）

SD 1 内で方形区画の石組と、そこから西へ延びる暗渠水路 2 本を検出した。石組は 1 と 2 に分けられ、各区画から西に暗渠水路が延びる。壁面の観察から、

SD 2 の埋没後に造成されたことが分かる。

暗渠水路等の形成時期は、石組から唐津刷毛目碗やキラ粉の軒丸瓦が出土しているため様相 5（18 世紀前半）以降と考えられる（渡邊 2017）。また、暗渠水路や石組の埋土から端反瓦や紅猪口が出土しているため様相 7～8（18 世紀第 4 四半期～1872 年）の頃が埋没時期と考えられる。

こうした方形の石組遺構は、栗林公園の動物園跡地内でも検出されている。溝のような落込みの廃棄後、その中に構築されており、深さ 1m で中央部に湧水がある。遺構の位置は、「栗林分間図」（安政 7 年（1824））の「藪・畠」に当たり、これらを維持管理するための農業用水施設と位置付けられている。本調査で検出した暗渠水路を伴う石組も、こうした水の流れのある灌漑施設だったと想定できる。現在も本調査地の南東側の地域には、皿井出水^{註 1}を含め数か所の出水が残ることから、古くから水源に恵まれた場所だったと考えられる。

石の積み方の観察から、①まず石組 1 の西壁と 2 本の暗渠水路が造成され、②その後の改修で南壁→東壁→北壁の順に造られ方形区画の形ができたと考えられる。また石組 2 は、断定はできないが、①の時期に形成されて②の改修に伴い石積みが崩された可能性もある。

①の時期には暗渠水路が 2 本とも機能していたと考えられ、暗渠水路 2 の位置が高く暗渠水路 1 は低いため、南から北に向かって水が出入りする流れがあったと推測される。②の時期には石組 1 の南壁が造られるため、暗渠水路 2 が継続して使われていたかどうかは不明である。ただし、石組 1 南壁の裏側には小振りな石材が積まれていることから、暗渠水路 1 から入ってきた水を運ぶ機能があった可能性も考えられる。

S K 1

SD 2 の上面で SK1 を検出した。SD 2 の埋没時期である様相 2～3（1620～1650 年）よりも後に造られたことが分かるが、時代を特定できる遺物は出土しておらず詳細は不明である。

S P 27, 28

石組遺構に沿う位置で、SD 1・2 の底面近くで SP27, 28 を検出した。恐らく水場の上に屋根等の建物が設置されていたものと推測される。

S P 1, 2, 3, 5, 7, 9, 10, 14, 19, 23

調査区東側で検出したピットの内、灰褐色の埋土を伴う S P 1, 2, 3, 5, 7, 9, 10, 14, 19, 23 については、S P 4, 6, 18, 21 や SD 2 の上から掘り込まれており、これより新しいものと判断できるため時期は様相 3（1640～1650 年）より後に掘られたと考えられる。なお、ピットの並びは判断できなかった。

まとめ

太田城については不明な点が多いが、『全譜史』に「太田村に在り 太田犬養（六郎と称す）之に居りき。其の子兼久あり。其の子に兼氏ありき。」とあり、太田犬養氏を城主とする平地の居城であったことが知られており、現在も「シロアト」という地名が残る。

本調査では、中世太田城の関連遺構としては近世以前の溝（堀跡）を検出した。SD 1 の埋没時期は不明だが、恐らく太田城の廃絶時期もこの頃と推測できる。また近世～近代にかけて同じ場所に水場の構築・改修が行われ、その東側の土地も長期にわたり何らかの形で使われ続けた状況が窺える。

これまで太田城跡内外で実施された調査では、北端で中世の柱穴と南北溝、近世～近代と推定される水路跡、その水路脇で近世の埋甕が検出されており（高教文振第 619 号平成 19 年 12 月 3 日）、本調査成果と同様、太田城廃絶後も土地利用が継続していた様子が窺える。

註 1. 「新撰諸国風土記」（松岡訓／未完）には、当該地の字名である「皿井」という泉が掲載されている。

参考文献

香川県教育委員会 2003 「香川県中世城館跡評価分布調査報告」
香川県埋蔵文化財センター 2003 「サンボート高松砦合整備事業に伴う埋藏文化財発掘調査報告 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ 第 1 分冊」
香川県埋蔵文化財センター 2000 「栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋藏文化財発掘調査報告 栗林公園」

渡邊誠 2017 「四国における近世瓦の生産と流通－高松藩における御用瓦師の成立－」『幕藩体制下の瓦』第 66 回埋蔵文化財研究集会
中山城山 1972 「復刻諸国風土記（第一）国譜 全譜史」藤田書店

第2表 出土遺物観察表 1

相面書 番号	出土場所 / 種類	種類 面相	法度(cm/g)	手法の特徴(外)(内)	色調(外)内) 地主 地成	備考
1	SK1	土顎部 下顎骨	口徑— 底径— 高さ(1.6)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・赤色利を含む 具	赤色土型A類似
2	SP06	再生土顎 高科頭顎	口徑— 底径(1.6) 高さ(2.4)	[外]ナデ 凹輪ナデ 上方ナデ [内]ヘラケナビカ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	
3	SP19	臼歯部 歯冠?	高さ(2.6) 底径(1.2) 厚さ(0.2) 長さ(7.0)		[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	
4	直相	再生土顎 茎	口徑(3.4) 底径— 高さ(3.6)	[外]ナデ リバウンドナデ [内]ナデ 凹輪ナデ 上方ナデ [外]ヘラケナビカ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	再生土顎薄 体相から芯に外反する口縁部(A)
5	直相	土顎部 根	口徑— 底径(3.6) 高さ(1.6)	[外]ナデ [内]ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の白骨利を含む 具	
6	直相 (瓦ブロック型)	再生土顎 高科口顎部 茎	口徑— 底径— 高さ(3.4)	[外]ナデ [内]マツブ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	
7	直相 (瓦ブロック型)	再生土顎 高科口顎部 茎	口徑— 底径— 高さ(3.3)	[外]ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	
8	直相 (瓦ブロック型)	再生土顎 茎	口徑— 底径(3.3) 高さ(3.6)	[外]ナデ 凹輪ナデ [内]ナデ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	黒斑有
9	直相 (瓦ブロック型)	再生土顎 茎	口徑— 底径(3.3) 高さ(3.1)	[外]ナデ [内]ナデ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	黒斑有
10	直相 (瓦ブロック型)	直相部 合付件	口徑— 底径— 高さ(1.7)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	合付直相
11	直相 (瓦ブロック型)	土顎部 根	口徑— 底径— 高さ(3.5)	[外]凹輪ナデ 凹輪多 目目 [外]凹輪ナデ 凹輪多 目目	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	短木有
12	直相 (瓦ブロック型)	直相 直相部	口徑— 底径(4.4) 高さ(2.4)	[外]凹輪ナデ 凹輪+ラウナ [内]凹輪	直相部直相 上口2.3V-2.3腰	内面に黒ねじき痕有
13	直相 (瓦ブロック型)	直相部 骨+茎	口徑— 底径(1.8) 高さ(3.2)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	直相部直相 上口2.0V-2.1腰	骨合せ等号と同一様体か
14	直相 (瓦ブロック型)	直相 茎	口徑(1.8) 底径— 高さ(2.6)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利 具	野原が入っていいで仕様ではない 比較
15	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相部 骨+茎	口徑— 底径— 高さ(2.6)	[外]凹輪ナデ [内]ナタウ	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	
16	SD1 (北神竹根 墓主)	直相部 根	口徑— 底径— 高さ(2.6)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	東後直相直相 口沿部外に黒ねじき痕有
17	SD1 (北神竹根 墓主)	土顎部 根	口徑— 底径— 高さ(3.4)	[外]コロナ [内]コロナ 骨頭柱	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・長石・白骨利を含む 具	新入(横幅 15~16cm 骨頭の芯に 斜削り川字光木鉛直相頭部)頭部頭部 頭部直相化
18	SD1 (北神竹根 墓主)	土顎部 骨柱	口徑— 底径— 高さ(3.5)	[外]ナデ ナタウナデ [内]ナタウナデ ナタウ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	
19	SD1 (壁+骨)	土顎部 骨柱	口徑(1.6) 底径(3.7)	[外]コロナデ [内]コロナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利を含む 具	頭部直相化 半身骨柱を算して再利用 の頭部直相
20	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相部 骨+茎	口徑(1.1) 底径(3.4)	[外]凹輪 [内]凹輪	直相部直相 上口2.3V-2.3腰	種類1~2
21	直相 (瓦+C-C 直相)	直相部 骨+茎	口徑(1.2) 底径(1.1)	[外]凹輪 凹輪ナデ [内]凹輪	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利 具	直相
22	直相 骨	直相 骨	口徑(4.2) 底径(1.1)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪	[外]17.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利 具	内面に黒ねじき痕 近世直相(?)の初期系器
23	SD1 (骨+C-C 直相)	直相 骨	口徑(5.5) 底径(5.4) 高さ(1.4)	[外]ナデ [内]ナデ	[外]直相 [内]直相	
24	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相 骨	口徑(1.8) 底径(4.4)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ 骨頭柱	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利 具	東後直相直相 骨頭柱直相
25	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相 骨	口徑(3.8) 底径(4.1)	[外]凹輪ナデ [内]凹輪ナデ	[外]19.0cm(2.2-3.1)腰 骨 30cm以下の長石・白骨利 具	頭部直相 170度回転一時に複数られた溝底直 相頭部直相
27	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相 骨	口徑— 底径(3.1) 高さ(2.4)	[外]ナデ 合付件 [内]凹輪	[外]透明直相 [内]直相 [外]直相	直相骨直付 直相系器 骨付直相 骨付直相
28	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相部 直相部	高さ(2.0) 底径(0.3) 高さ(0.4)			直相式
29	SD1 (瓦+C-C 直相)	直相部 直相部	口徑— 底径(1.4) 高さ(0.5)			

第3表 出土遺物観察表2

報告書 番号	出土箇所 / 屋敷	種別 器種	法面(ox/p)	手法の特徴(外)内)	色調(外)(内) 施土 焼成	備考
30	SDH-2 住居1部分	土器類 油壺	口径- 高さ[4.0]	[内]ナデ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2にない焼成 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	焼成下焼成
31	SDH-2 住居1部分	陶器類 油壺	口径- 高さ[1.7] 底径[2.6]	[内]角脚部分の一部 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2にない焼成 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	
32	SDH-2 住居1部分	陶器類 油壺	口径- 高さ[1.7] 底径[3.5]	[内]コロナ 凹和ナラフリ 脚部ナデ 脚部	褐色(自然焼 成)1994-2灰陶 表面	
33	SDH-2 住居1部分	瓦 軒丸	長径[2.4] 短径[1.5] 瓦当等[1.5]	三色瓦-瓦 瓦大マツ マツ瓦 [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面以下に石英-長石-赤色料を含む	瓦の量が多い 式瓦の焼成に使われていたか 未定-焼成
34	石垣埋土 (SDH-2側)	土器類 罐	口径- 高さ[0.6] 底径[0.6]	[内]ナデ [内]ナデ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	西村庄
35	石垣埋土 (ベルトG-2南側)	陶器類 罐	口径- 高さ[5.7] 底径[1.6]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
36	石垣埋土 (SDH-2側焼成地 ベルトG側)	陶器類 罐	口径- 高さ[5.0] 底径[2.6]	[内]コロナ 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	把前直系系属(江戸時代初期段)
37	石垣埋土 (SDH-2側焼成地 ベルトG側)	陶器類 罐	口径- 高さ[5.0] 底径[2.6]	[内]コロナ 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
38	石垣埋土 (ベルトG-2側)	陶器類 罐	口径[2.4] 高さ[2.2] 底径[2.2]	[内]足底深焼成 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	D級部に割り離れ直す
39	石垣埋土 (ベルトG-2南側)	陶器類 罐	口径- 高さ[5.0] 底径[1.6]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
40	石垣埋土 (ベルトG-2南側)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.2]	[内]凹和ナデ 底径切欠き-底脚部凹窪 [内]凹和ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
41	石垣埋土 (ベルトG-2南側)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[1.6]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
42	石垣埋土 (SDH-2)	陶器類 罐	口径[2.8] 高さ[2.2] 底径[2.2]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
43	石垣埋土 (ベルトG-2側)	罐 小瓶	口径- 高さ[1.6] 底径[1.6]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	夏村系系属
44	石垣埋土 (SDH-2側)	罐 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
45	石垣埋土 (ベルトG-2側)	罐 罐 口	口径- 高さ[4.5] 底径[4.5]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	D級部が反る 特徴的な石組か 石組の性交換か
46	石垣埋土 (ベルトG-2側)	罐 罐	口径- 高さ[4.5] 底径[4.5]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
47	石垣品 (SDH-2側)	土器品 土器	長径[0.6] 幅[1.1] 底径[0.6]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	孔が贯通するか
48	石垣埋土 (ベルトG-2南側)	瓦 瓦丸	長径[1.2] 幅[1.2] 厚さ[0.2]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	斜丸ノマ所有
49	石垣埋土 (SDH-2側)	瓦 瓦丸	長径[0.7] 幅[0.7] 厚さ[0.7]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
50	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(東側)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
51	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	土器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
52	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]凹和ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	焼成後削除して石垣や壁で接着するものに變化する
53	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	
54	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	罐 罐	長径[1.1] 幅[1.1] 底径[1.1]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2にない焼成 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	
55	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	瓦 瓦丸	長径[1.1] 幅[1.1] 底径[1.1]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2にない焼成 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	
56	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	瓦 瓦丸	長径[1.1] 幅[1.1] 底径[1.1]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2にない焼成 表面以下に石英-長石-黒色料を含む	
57	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	西村庄
58	石垣1 石垣内鉢巻 東西側(石垣脚柱)	陶器類 罐	口径- 高さ[2.0] 底径[2.0]	[内]ナデ 凹和ナラフリ 脚部カスリ [内]ナデ	[内]1994-2灰陶 [内]1994-2灰陶 表面	

第4表 出土遺物観察表3

報告書 番号	出土遺構 / 碑位	標示 番号	法箇(cm/g)	手造の特徴(外) (内)	色調(外) (内) 地土 地城	備考
55	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	土取盤 盛枠	口径:32.0 高さ:4.0 重さ:1.2	[外]ナメ 内:ナメ 横方向のハケ ハサの跡目	[内]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	色調下部に黒褐色 口縁側面にも同様の裏面か 直芯
60	石柱 石柱内柱基座	土取盤 盛枠	口径:24.0 高さ:4.0 重さ:1.2	[外]ナメ 内:ナメ 横方向のナメ 内:ナメ ナメ	[内]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	側面下部に保付有 内口縁側面に裏面していない内丸 有
61	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	土取盤 盛枠, 壁	口径: 高さ:4.0 重さ:1.2	[外]横方向のナメ 横方向のナメ 内:ナメ 横方向のナメ 横方向のナメ 内:ナメ	[内]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	複合保有
62	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	陶製(漆塗) 壁	口径:16.0 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗毛呂 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	漆毛呂漆 漆相
63	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	陶製(漆塗) 壁 斜口縁付	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	重ね焼き保有
64	石柱 石柱内柱基座	陶製(漆塗) 壁 斜口縁付	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	西側の形の基面か -
65	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	陶製(漆塗) 壁 斜口縁付	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	石柱側面の漆塗有 内縁側面:無ナメ
66	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	盛枠 盛口縁付斜	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	-
67	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	盛枠	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	初期高級
68	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	瓦葺土壁 瓦	口径:18.0 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	-
69	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	瓦 瓦丸	口径:14.0 高さ:4.0 重さ:0.7	[瓦]漆塗ナメ(瓦丸巻) [瓦]漆塗ナメ(瓦丸巻)	NH 実 重300g下の石実・長芯・色々和を含む 直芯	瓦丸キラ付有 漆塗瓦巻正中腰山開
70	石柱 石柱内柱基座	瓦 瓦丸	口径: 高さ:4.0 重さ:2.0	[瓦]漆塗瓦丸文法(瓦丸巻) [瓦]漆塗瓦丸文法 内:ナメ 内:ナメ	NH 植 重300g下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	瓦丸漆合式 瓦丸キラ付有
71	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	鉄製品 箱	高さ:18.0 幅:9.0 厚さ:2.0 重さ:2.0	-	-	-
72	石柱 石柱内柱基座 (北西側 石柱脚部)	石柱 石柱下部 (E12.3)	口径:28.0 高さ:17.0 重さ:11.0 直芯:5.00 重さ:2.00	-	-	-
73	石柱 石柱内柱基座 (E12.3)	石柱 石柱下部 (E12.3)	口径:15.0 高さ:15.0 重さ:3.00 直芯:3.00	-	-	-
74	漆塗木箱	土取盤 斜口縁付	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	-
75	漆塗木箱	盛枠 斜口縁付	口径:3.0 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗(一部に封付有) 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	初期木箱 漆塗山開 漆塗漆塗木箱の埋没時刻か
76	漆塗木箱 (石柱脚部)	盛枠	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗漆塗瓦丸 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	青磁漆塗
77	漆塗木箱	土取盤 盛枠	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	-
78	漆塗木箱	土取盤 盛枠	口径:4.0 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	初期下保化
79	漆塗木箱	陶製 斜口縁付	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	初期高級 漆塗一側 初期漆塗木箱の埋没時刻か
80	漆塗木箱	陶製(漆塗) 壁	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯を含む 直芯	平安後期高級
81	漆塗木箱	陶製(漆塗) 壁	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 横:30.0cm下の石実・長芯・裏面を含む 直芯	定期高級 漆塗山開
82	漆塗木箱	漆 漆丸	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 直芯	報告書参考:12回一全体か
83	漆塗木箱	盛枠 (天井板)	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 直芯	定期高級 漆塗山開
84	漆塗木箱	盛枠	口径: 高さ:4.0 重さ:1.0	[外]漆塗ナメ 内:ナメ 内:ナメ	[外]30.0cm/28.0cm [外]30.0cm/28.0cm 直芯	-
85	漆塗木箱	瓶 實水甕	高さ:2.3 幅:2.3 深さ:3.2 重さ:3.5	[外]-- [内]--	[外]-- [内]--	2枚の瓶が重なっており、両面に「實水甕」の印が焼られる



調査区西側（石組遺構）（上空から、上が西）



暗渠水路1（東から）



暗渠水路2（東から）



石組1南壁 断面（東から）



SK1 完掘（北から）

写真図版
II



SP 5・6 (北西から)



SP27 (南から)



調査区東側 (ピット完掘) (西から)



SD 1・2 完掘 (北から)



A-A' 壁面 (南から)



B-B' 壁面 (北から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおたじょうあと							
書名	太田城跡							
副書名	太田上町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市教育委員会							
シリーズ番号	第227集							
編著者名	山元 敏裕、佐藤 容、上原 ふみ							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	°	′			
太田城跡	香川県 高松市 太田上町	37201	10887	34° 18' 15"	134° 02' 37"	2021.6.28 ～2021.7.10	54m ²	宅地造成 工事
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
太田城跡	城館跡	弥生時代 近世以前～近代		溝、石組遺構、 ピット、土坑		土師器、須恵器、陶器、磁器、石臼、鉄製品		
要約	<p>今回の調査では主に近世以前から近代までの遺構を検出した。調査地は太田城跡の南西隅に位置する。調査区の西側では南北溝2条と土坑を、東側では弥生時代から近世以降までの時期が混在する多数のピットを検出した。</p> <p>溝2条はもとは中世太田城に伴う堀として利用されていたと考えられ、埋没時期については、東側溝は17世紀前半(様相2～3：1620～1650年)、西側溝はそれより前と考えられる。また西側溝内では、2本の暗渠水路を伴う石組を検出した。東側溝の埋没後、18世紀前半以降に造成され、周辺の環境から、近世後期～近代(様相7～8：18世紀第4四半期～1872年)に埋没するまで水場として使用されたと考えられる。土坑は東側溝の埋没後の造成である。</p> <p>堀の埋没後、近代にかけて水場等の改修が繰り返し行われ、太田城の廃絶後も土地利用が継続していた状況が窺える。</p>							

太田上町宅地造成工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

太田城跡

令和4年3月31日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 株式会社横野ハウジング・高松市教育委員会
印刷 有限会社中央ファイリング